



# イスラエル国 テル・レヘシュ遺跡でみつかったシ ナゴーグ

著者	山内 紀嗣
雑誌名	阡陵 : 関西大学博物館彙報
巻	76
ページ	8-9
発行年	2018-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00023799">http://hdl.handle.net/10112/00023799</a>

# イスラエル国 テル・レヘシュ遺跡でみつかった シナゴーク

山内紀嗣

## 1 はじめに

テル・レヘシュ遺跡はイスラエルの北部であるガリラヤ地域にある遺跡（図1）で、前期青銅器時代からローマ時代にいたるテル型の遺跡である（写真1）。



図1 レヘシュの位置



写真1 レヘシュ遺跡（西より）

テルの大きさは長さ約400m、幅約250mあり、北東から南東にやや細長い。頂上部には約80m四方の平坦地があり、この地区が重要な場所であることは想像できた。また地表には石列が露出している部分もあり、周囲に落ちている土器

片などから石列はローマ時代のものであることはわかっていた。

この遺跡の調査は2004年から始め、昨年で第12次調査になる。遺跡の規模が大きいこともあり、毎年少しずつ調査面積を広げているのである。

2016年夏は頂上部平坦地南部分でみつかった後期鉄器時代（B.C. 6～5世紀頃）の大型複合建物の規模を確認する調査を行っていた。この建物はバビロニアあるいはペルシャに支配されていた時期のもので、その様子確かめようと考えていた。その発掘の折にローマ時代の建物がみつかったのである。ローマ時代のレヘシュは小さな村落で、オリーブ栽培などの農業をしながらユダヤ教に則った生活を送っていたことがわかっていた。

建物は壁の内側に長方形の切石を並べたものであり、シナゴーク跡とわかった。2016年は建物の調査期間の問題もあり、その西側半分しか発掘できていなかったが、2017年に東側半分を掘り、全貌が解明できたのである。

## 2 シナゴークの構造（写真2）

建物の南北壁の方向は北から28度東に振れている。平面形は正方形に近い。南北8.5m、東西9.3mある。壁の厚さは場所によってやや異



写真2 みつかったシナゴーク跡（上が北）

なるが約80cmある。建物の入り口は北側の辺の中央にあることがわかった。

このあたりはテルの頂部ではあるが、石灰岩の岩盤が露出しており、壁は直接岩盤の上に設置されている部分もある。四周の壁は20~40cmの礫を用いて基礎を構築したもので、上部には当然日干し煉瓦の壁があったであろう。北辺の中央には壁の基礎列が無いかわりにかまち石が置かれ、入り口とわかる。入り口にはドアのストッパーとみられる石材の断片が残っていた。また、四周の壁の入り口部分を除く全てに、壁の内に沿って石灰岩製の切石が置かれていた。この切石は幅約40cm、長さ50~80cmあり、内側に露出する面をそろえて上面もほぼ平坦になるようにそろえていた。これらの切石がシナゴークのベンチになるのである。

部屋の中央近くには2個の石灰岩製切石が置かれている。西側のものの下面は建物の地盤である石灰岩製の岩盤の上に直接置かれているが、東側については下面は土の上である。この2個の切石は当初、トゥラー（ユダヤ教の律法書）などを置く台とも考えたが、両者がほぼ中央に東西位置し、建物の棟のあったとみられる場所であることから、屋根を支える柱の基礎と考える。

建物の床面にはシナゴークが建設される前の岩盤などをくり抜いた貯蔵穴などがあつた。

床面からはガラス容器の破片や土器類が出土している。まだ整理が完全に終了したわけではないが、注目すべきものにランプの断片がある。ランプは数個出土しており、紀元後1世紀のものであることは確実である。ランプには黒灰色で緻密な粘土を用いたものがあり、当時のエルサレム地域で製作されたものである。また、建



写真3 石製カップ

物の内外から石灰岩をくり抜いて製作したカップの破片（写真3）が出土している。石製のカップはユダヤ教の儀式に用いるものである。

#### 4 みつかったシナゴークの意義

建物は壁の内側に座るためのベンチが並べられているところから、ユダヤ教の集会所であるシナゴークであることは間違いない。また、シナゴークの南東20m付近には石を階段状に並べ、表面をプラスター（石灰）で塗り固めた施設がみついている。これがユダヤ教のミクヴェ（体を清めるためのミソギの施設）へ降りる階段であるならばまさにユダヤ人のための施設であったことがわかる。

この時期のユダヤ教の神殿はエルサレムにある。その神殿に集まることのできない者はそれぞれの地域で、神殿に代わるシナゴークに集まり、律法を朗読し教義などを学ぶのである。

イエスの生きていた紀元1世紀前半のシナゴークはイスラエル国内ではこれまで7例しかなく、そのうちガリラヤ地域ではわずか2例しかない。1つはガリラヤ湖西岸のミグダル（マグダラ）である。ミグダルはイエスに従ったマグダラのマリアの出身地ともされている町であった。

ユダヤ教徒であったナザレ（ナザレはミグダルの西約10kmにある町）のイエスはユダヤ教の安息日にはシナゴークへ行き、人々に教えや奇跡的な癒しを話して回ったらしい。イエスの活動の大部分はガリラヤ南東部のガリラヤ湖周辺で行なったということであるから、テル・レヘシュ遺跡のある下ガリラヤ地域も含まれる。そうだとすれば、このシナゴークにもイエスが来訪して教えを説いた可能性がある。

テル・レヘシュ遺跡でみつかったシナゴークの規模は小型ではあるが、重要な意味のある建物である。将来的には遺跡を修復し、見学できる施設として復元できれば良いのだが。

#### 〔参考文献〕

- ・F・G・ヒュッテンマイスター、H・ブレードホルン（山野貴彦訳）『古代のシナゴーク』2012年 教文館
- ・山野貴彦「新約時代におけるパレスチナのシナゴーク」『考古学から見た聖書の世界』2014年 聖公会出版

関西大学非常勤講師